

十月二十七日から十一月三日まで、東京の倫理研究所本部に程近い靖国通りなどで東京神田古本まつり」が開催されました。

PRチラシには「読書週間にあわせたこの催事の目的は、書物に関する様々なイベントを通じて多くの読書人の期待にこたえることにあります。現在では、東京の風物詩の一つに数えられるようになり、全国、さらには海外からも多くの方々、神田神保町を訪ねて来られるようになりました」と記されています。読書の秋にちなんだ趣ある「まつり」は、毎年大きな盛り上がりを見せています。

倫理運動の創始者・丸山敏雄は、研究者・教育者・芸術家・運動家といった様々な顔を持ち、専門である歴史分野以外にも文学、芸術、伝記、宗教、倫理、哲学：と、あらゆる分野の書物を蒐集しました。その数は現在保管されているものだけでも三五八〇冊に上ります。本は常に傍らに置いていた大生の「パートナー」だったのでしょう。古本まつりが行なわれていた神田の古書店にも、よく足を運んだようです。

丸山敏雄は書物に対し、その全てが自分に学びを与えてくれる友であるとして、非常に大切に扱いました。膨大な数の蔵書には、その一冊一冊に購入年月日と購入した書店が記されており、本文には朱線や書き込みが、そして巻末には読了の日時や感想が書き込まれていました。

また「書中の人物のすさまじい努力が、いつも自分を激励してくれる。ある時は我

## 書物は自己を励ます 友であり師である



絵・わたなべじゅんじ

が友となり、ある時は我が師となって、いつもいつも教え励ましてくれる」と語っています。そこには、趣味や習慣としての読書を超えた、著者や書物そのものに対しての深い尊敬の念が感じられます。

書架の本を 人がいじれば すべてそれとわかるもかなし 本読みわれは (敏雄)

最近では、インターネットで検索すれば、欲しい本があつという間に手に入り、内容や評価も調べることが出来ます。本は以前よりも身近にあるはずですが、昨今、多く叫ばれるのは、各種書籍や新聞に代表される「活字離れ」です。書物は私たちと活字との距離を近づける以上に、膨大な情報も私たちに与えているのでしよう。

丸山敏雄は、「いい本がある書店の前を通りかかると、何かしら匂うような気がする。酒好きが酒の匂いに敏感なように」と嬉しそうに語ったことがあります。それは書物から知識、情報、感動だけでなく、インターネット等からは感じづらい著者の「息づかい」や「ぬくもり」を感じていたからではないのでしょうか。

本は私たちの足りない知識を補充し、心を満たす味わいを与え、じかに接したことがない人物に触れることができます。書を友とし、師とする生活は、私たちの日常に彩りを与えてくれるものです。季は読書の秋、いつもより早起きをして、静かな時間を読書に使ってみてはいかがでしょう。